

迷 い ど き (1)

——私の場合——再就職——

向 山 陽 子

実は……私、今、迷いに迷っています。

ある学校から、産休代替教員の話があるのです。つまり再就職（一年間ですが）の話です。

「何故 迷うの？」……実は、一人娘の待ちに待った入園と重なるのです。

「では、保育園に入れたら？」……ええ、でも娘が入園する幼稚園は、まさに「探し求めていた園」なのです。一年前から子どもはもちろんのこと、私自身が先生方や理事の方々から学びたいと、入園を待ちに待っている園なのです。「近くに公立幼稚園はないし（練馬区には三園しか公立がないのです！）近くの私立はあまり……いえ、はっきりいって行かせたくない。これでは、私も仕事をして、保育園にしようかしら……」と私達母子のおかれた教育環境の現状にがっかりし、思いきり遊び、豊かな幼児期をと、仕事をしてきたのに（実は、三年

前までの十一年間、幼稚園の先生でした)、そして、自分の子にこそ、と、後髪をひかれ、涙ながらに、仕事を辞めて、地域に埋没して、ご近所の子育て仲間と、朝から夕方まで、泥んこになって遊んできたのに、どうして、思いきり遊べる幼稚園がないの?と、恨みつらみが口をつけて出そうになっていた時、大先輩から教えていただき、隣の区ではあるけれど、徒歩十五〜二十分程度通える「ひこばえ幼稚園」にめぐり会えたのです。

見学に行くと、子ども達はよく遊び、当然ながら、子達の目はキラキラしており、保育室、園庭からは健やかな子どもの成長を願い、子どもの世界を大切にしているっしやる先生方の思いが伝わってきます。

副園長の木口先生にお話を伺うと、私自身がこの先生から多くを学べると感じ入り、又、園長室の本棚には、倉橋惣三全集、周郷博全集、森有正全集、幼児の教育復刻版が並んでおりました。

理事の方々の中に、太田愛人牧師、バックの井草教会の熊澤義宣牧師のお名前を見つけた時はびっくりし、さ

らに園長の小塩節先生が、私の主人の大学時代の忘れられぬ教授の一人であったと聞くに至っては、もうこれは「運命」を感じるしかない程の、ひこばえ幼稚園との出会いだっただけです。

最近は大園希望者が多く、私は緊張の極みで面接に臨み、娘は喜々として先生方と遊び、無事入園許可をいただきました。

「四才になったら?」「四月になったら?」と指折り数える娘。「ちょっぴりいやだな。おかあさんは、一緒にいって、迎えにきてくれるんでしょ」と不安をのぞかせながらも「ひこばえの先生は優しいよ。いっぱい、いっぱい遊ぶんだ」と、幼いながらに不安をのりこえて、自分を納得させて、希望へとつなげる娘です。

そう、勤めはじめると、母子で手をつなぎ路辺の草花と遊びながら…と、思い描いていた送り迎えができません。

「じゃあ、その産休代替教員の話を断りなさいよ」……

そうなのよね。でもね……。

実は、娘が四才になった頃から、その学校へ一日三時間、週五日、非常勤で行っていて、その続きを、と、いってくださる話なのです。

「大切な一人娘さんは、その間、どうしているの？」

近くの子育て仲間にお願ひしています。もっとも、その前から朝の九時すぎから、お弁当持ちで、近くの公園や、お友達の家を往き来してお友達と遊ぶ生活でしたから、娘の生活自体は、それほど変化はありませんが、朝九時すぎから午後二時前まで五時間ほど離れて、私が戻った時は、わがままをいって甘えます。思いきりうけとめてあげると、又、すぐ、お友達の中へ入っていきま

す。
非常勤の話がきたのは、ちょうど、そのひこばえ幼稚園の面接が終わり、次の日の発表を不安な面もちで待っていた夕方でした。

朝から夕方まで、私から離れて友達と遊ぶ娘に、何かをはじめなくては、と真剣に考えはじめ、履歴書を用意

しなくてはと思っていた矢先でしたから、一日三時間ならできると、とびつきました。

三月までの話なので、娘の入園には重ならないし、冬の厳しい期間だが、地域の仲間にお世話になりながら、再就職へのウォーミングアップのつもりでがんばってみようと思ったのです。

有難いことに、地域の仲間も心よくひきうけてくださり、「みづきちゃんの好きなように」と、娘がその日、遊びたいお友達のお宅で預っていただけという願ひもない応援がきました。もちろん、母親の私としては、いくら私がずうずうしくとも一―二軒のお宅を決めたかったのですが、事実上、娘の成長の過程、子どもの世界のこと、例えば、今日は女の子と遊びたい。だって○○君、いじめるんだもん」(実は、○○君は好意からかまい、娘が泣くとニヤニヤして、さらにかまう。娘にはまだそれが好意からとはわからないので、受けとめられないでいるのですが)等と、親の考えたようになり、いかず、どこのお宅でも預かっていただけというの

は、本当に有難い応援でした。

ちょうど、主人が長期出張の間に仕事ははじまり、私としては、娘と二人の生活のペースを守れるので、楽なスタートでした。が、娘は夕方になると「寂しいよ、おとうさんのだっこがいいよ」と泣きました。

三週間目、主人が帰ってきた週に娘は発熱しました。ちょうど、大島の方々が避難先でのストレスで風邪や発熱が多くなった時で、娘のそれもストレスからだろうと



思われました。発熱したのが日曜日で、月曜日には微熱となり、私は、「急いで帰ってくるからね」と、預けて仕事にでかけました。今思うと、一日位欠勤して、一緒にいてやればよかったと思います。その時は必死だったのですね。

又、私が勤めに出るようになってから、娘はおかあさんごっこの「おかあさん」をしなくなりました。それまでは、「おかあさんごっこしよう」「うん」「おかあさん！」

と一番に名乗りをあげて、一方的に思いどおりに皆を動かす暴君かあさんを演じ、母親の私があだから娘はあのように演じるのだからかと、私を悩ませていた娘でしたが、びったりとおかあさんをしなくなりまして。きつと心に余裕がなかったのでしょうか。だからといって赤ちゃんやおばさんもしないのです。プライドのようなものが邪魔をしているようでした。

私は娘が一人っ子で、口うるさい母親とはいっても、基本的には好きに遊べるよう考える母親の私といて、それまでは思いどおりにならない思いや、心細さを感じないでもよかったというのがわかりました。

祖母の家の愛犬、愛猫が死に、自分のざりがにや、かぶと虫が死んで、「おかあさん、死なないでね」と急に目に涙をためて、抱きついてくる娘でしたが、所詮一人っ子。兄妹達との関係で、自分が我慢することのなかった娘でした。そして、家の外では「元氣いっぱい、たくましく、いい子」をやっていた娘でした。

「おかあさん」を演らなくなった娘を見て、どうかやさ

しく強く、のり越えてほしいと願わずにはいられませんでした。

木曜日がお休みなので、我家で遊ぶ日にしたり娘とゆったりと過ごす日にし、主人が休みの土曜日は主人に頼みました。が、主人は眠っていたので、ふとんの中。娘はお友達のお家の方がいいといい出す始末です。もう、女の再就職をはばむのは、娘より主人の方なのだから……。

こうして一ヶ月が過ぎ、三週間の冬休みに入りました。朝八時に朝食をとり、九時には出かけるというリズムも狂いかけてましたが、気持ちの上でのんびりとし、朝食前に一遊びという以前のペースにもどり、娘はしばらく離れていた、絵画、制作に夢中になりました。

私、が仕事をはじめても、朝急がせて、忙しい思いをさせてはいけない。時計を見ながらの生活は、通園するようになったらその先半永久的に続くのだから、と肝に銘

じた私でしたが、やはり急がせていたと反省。

時間の問題というより、心の余裕の問題なのだからと改めて心に刻みつけると、娘との朝食がゆったりと楽しく摂れ、結局、娘も気持ちよく、早く食べるようになってから不思議です。

クリスマス、お正月といつもは会えないおにいさんやおねえさんとも遊び、あわただしい中にも楽しいことがたくさんあり、「成長した」と周囲に印象つけて冬休みが終わり、再び私の仕事が始まりました。

前の一ヶ月の経験から、預ってくださいる家を二―三軒にしぼってのスタートです。

週一回、皆でいっている児童館の幼児教室の先生も、母親のきていない娘を暖かく配慮して下さっているのが、娘の私との会話の中からうかがわれ、有難い限りです。

寒さも厳しくなってきた、これからが私の大変な時期です。

三年前の寒い雪の多かった冬、保育ママさん、職場、

家を守るように往復しながら、寒さからの心細さもあったでしょう。おんぶした私の背中から泣いて離れなかった一才になったばかりの娘を思い出します。朝、夕、寒い中、娘をおぶった私も「どうしてこんな思いをしなくてはいけないの？」と泣きたい思いでした。

あの頃よりずっと時間的に楽な勤めです。娘も大きくなってくれました。地域の協力にも恵まれています。

でも、心して、この時期をすごそうと思います。娘の体はもちろん、心が寒くならないように。

入園前の大切な冬。母子でのんびりゆったりと暖かく、すごせる最後の冬なのだから。春がきたら、心おきなく、外へ送り出してあげられるように、と、非常勤の話がくるまでは考えていた私なのですから。

主人に相談した時、「みづきに何かあったら、あなたは仕事を休めるね」と、念を押されました。

私には、夢中になると、一番近い人を犠牲にしても外のために動いてしまうという悪癖がありました。

この冬一番近い人を大切にしながら、一日三時間ずつ五日間勤められたら、子育てをしながらの再就職も夢ではないでしょう。

私が前の仕事を辞めたのは、子どもを持って以前のようには仕事ができなくなった自分自身への情けなさもありました。

仕事量だけでなく、仕事への集力中、家に帰ってきてから仕事の事を考えられない事からくる申し訳なき。

子どもを産み、育てながら、保育という仕事に携る大切さは頭ではわかっていながら、我子への愛情と、責任を持つ子等への思いが敵対してしまい、それぞれに、充分してあげられない後めたさに、自分自身を追いこんでしまったようです。

又、十年近く勤め、責任ある役職をいただいている手前、主人がいうように「娘に何かがあっても休める私」では、なかったでしょう。

家庭にいた三年間、家庭生活がいかに大切か、身にしみて感じました。そしてやっと家事が好きになってきま

した。台所に立つのが楽しくなりました。

その上でなお、仕事がしたいという欲張りな私です。

娘の幼児期は近くにおいて、その後に再就職ができたら

……との願望を抱いていた私です。

大学の恩師に非常勤で勤めはじめた報告と、その後にくる産休代替教員の話は断ろうと思うと話しましたら、

「甘いわよ。再就職する気があるのなら、しがみつきなさい」と叱咤激励されたのです。

その日から、私の迷いははじまりました。

— つづく —